織田さんら最優秀

作文コンクール 県審査

第65回全国小・中学校作文コンクール（読売新聞社主催、文部科学省、県教育委員会後援、JR東日本・東海・西日本、イーブックイニシアティブジャパン協賛、三菱鉛筆協力）の県審査が、読売新聞水戸支局で行われた。2556編（小学校低学年3322編、同高学年646編、中学校1588編）の応募があり、最優秀賞は小学校低学年の部が取手市立桜が丘小2年、小山陽向君(7)の「ぼくの夏休み」、同高学年の部は春日学園つくば市立春日小6年、中村桜さん(12)の「姉と私」、中学校の部は茨城大教育学部付属中2年、織田永玲奈さん(14)の「小学校のきらめき」が選ばれ、中央審査に進んだ。

小学校低学年の部

「ぼくの夏休み」小山 陽向君

一人で過ごした夏、自信に

夏休みに1週間、埼玉県の祖母宅に初めて一人で宿泊した。母親や、いつもはあまり仲良くできていない4年生の姉と電話し、お互いに会いたい気持ちが募った。父親に迎えに来てもらい帰ると、家族みんなが笑顔になったというエピソードをほほ笑ましく描いた。

家族から離れての生活が印象に残り、作文の題材に選んだ。さみしさはあったが、「一人で過ごせて、自分でもすごいと思った」と自信がついたという。

国語の授業や作文は苦手で、受賞には「びっくりしたけどうれしかった」と話す。家族も喜んでくれ、姉も以前より遊んでくれるようになるなど、「もっと仲良くなれた」という。

指導した佐藤拓弥教諭は「じっくり考えながら書いてくれた。子どもらしい目線で、家族の温かさを感じさせられた」と話した。

小学校高学年の部

「姉と私」中村 桜さん

気持ちの変化 記録に残す

四つ上の姉が7年前、交通事故に遭い大けがを負った。当時の家族の悲嘆、脳外科医の懸命な治療で姉が一命を取り留めたこと、時間が経過していくにつれて変化した家族や自分の気持ちを素直に書き留めた。

受賞の知らせを、今もなおリハビリを続ける姉に報告すると、「『すごいね。おめでとう』と喜んでくれた」とほおを緩める。

「自分の気持ちの変化を記録に残したいと思って書いたので、気持ちの表現をたくさん入れました」と振り返る。

姉の命を救った脳外科医の姿を見て、「この人たちみたいになりたい」と憧れる。

担任の早乙女雅代教諭は「本人の気持ちがすごく伝わってくる作品。普段からよく読書をしているから、表現力が豊かです」と感心していた。

中学校の部

「小学校のきらめき」織田永玲奈さん

苦労から得た達成感 力に

様々なコンクールに応募していたが、初の受賞が最優秀賞で「うれしいし、驚いた」と顔をほころばせた。

小学校で一番の思い出として心に残る6年生の運動会を題材にした。通っていた小学校では、開会式や競技種目の段取りを全て児童が決める。最高学年として夏休み明けから毎日、休憩時間を使って話し合った。

苦労したからこそ得られる達成感やさみしさを情景としてつづった。つらい時も、その頃を思い出すと「頑張ろう」と力がみなぎる。

「書くことが好き」で、学校を舞台にした青春小説を創作し、設定や原稿をノートに書きためている。「筆が進んだ。こんなに書いたのは初めて」という受賞作は、400字詰め原稿用紙13枚の力作。指導した開田晃央教諭も「他の生徒と比べてなかなかの長編」と話す。

経験は将来の道しるべ ■講評

「生きるとは、一つ一つの困難をのりこえていくこと。そしてそこに喜びや楽しさを知ること、いろいろ経験をすることだと思う。……今までの思い出は、生きていく中で安らぎになったり道しるべになったり、時に困難を乗り越えていく時には助けとなるだろう」

中学校の部最優秀賞、織田永玲奈さんの文章からの引用です。今回の3点の入賞作品には、将来の安らぎや道しるべ、助けとなるような経験が、それぞれ描かれていました。

小山陽向君は、「一人でおとまり」を初めて経験しました。少し背伸びをしている陽向君の複雑な気持ちと、家族が互いを思い合う気持ちが言葉の間に見え隠れしていて、この経験から家族の温かさを実感したことが伝わってくる作品でした。もっと大きくなってから、陽向君はきっと、一歩成長したこの夏を懐かしく思い出すのでしょう。

中村桜さんは、お姉さんの交通事故というつらい経験を文章にしました。当時のお母さんの表情やお姉さんの様子などが詳細に描写され、幼い桜さんの受けた衝撃の大きさが伝わります。心がつぶされそうな不安、家族の闘いの日々、そこに差してきた光。それらの経験を糧に、脳外科の医師になろうと決意した桜さんの思いの強さが胸に迫ります。

織田永玲奈さんは、小学校の行事を運営した経験を振り返りました。充実感にあふれた幸せな経験として読み進めた後で、当時の永玲奈さんが人間関係に苦しんでいたことを重ね合わせると、この経験の価値が一層強く感じられます。この経験を「いい思い出」で終わらせず、その意味を自問し続けたから、冒頭に引用した文章のように考えを深めることができたのですね。

私たちは日々様々な経験をしますが、皆さんのようにその時の心の中をしっかりと見つめ、言葉にすることで、経験はより深く胸に刻まれ、いつか大きな道しるべや力強い助けとなるのでしょう。そのようなことを考えさせてくれた皆さんに感謝して、講評といたします。

（県教育庁義務教育課 木村真理指導主事）

その他の入賞者

（カッコ内は指導教諭、敬称略）

〈小学校低学年の部〉

◆優秀賞　「かぞくのしごと」小美玉市立玉里東小1年柴崎叶望（堀川徳代）▽「かわっていくなっやすみ」取手市立高井小1年古川陽花里（飯田美詠子）▽「大すきな大じいちゃん」つくば市立谷田部小2年西谷綾乃（高橋希生）▽「夏のたのしみ」ひたちなか市立那珂湊第一小2年北村桃子（岩田恵子）

◆佳作　「わすれないために書く」リリーベール小3年小野慎馬（森裕子）▽「やさしさのリレー」取手市立桜が丘小3年知本嵩久（梶美和子）

〈小学校高学年の部〉

◆優秀賞　「野良猫のボス『モジャ』」常陸太田市立誉田小4年和田祐季（篠原博子）▽「太陽のような存在」春日学園つくば市立春日小5年久保月子（久保田晃弘）▽「ひめゆりの塔に行って」神栖市立植松小6年花塚あこ（小堀綾香）

◆佳作　「はっちゃん」結城市立江川北小4年黒杭功祐（岩田幸子）▽「九年間の時をすごしたつくば市」つくば市立吾妻小4年西沢もなみ（山越理加）▽「大すきな本」結城市立結城西小5年関根梨帆華（小林淳子）▽「特別支えん学校との交流」鉾田市立大和田小5年寺内あい（近藤由美）

〈中学校の部〉

◆優秀賞　「努力の先に見つけた光」筑西市立下館南中1年高崎友萌（谷島美樹）▽「努力の先に待っているのは…」古河市立古河第三中1年根岸千陽（渡辺純子）▽「おじいちゃんとの約束」茨城大教育学部付属中3年渡辺麻里亜（矢崎寛子）

◆佳作　「夢に向かって～一歩ずつ前進～」古河市立古河第三中1年稲葉幸音（渡辺純子）▽「当たり前に感謝」茨城大教育学部付属中2年小河原優音（開田晃央）▽「県大会出場の体験と部活動で学んだこと」春日学園つくば市立春日中3年横谷有紀（柏村秀子）

〈審査員〉（敬称略）

茨城大教育学部付属小教諭　野村仁▽ひたちなか市立田彦小教諭　大友亜紀子▽水戸市立内原小教諭　山崎敦子▽桜川市立羽黒小教諭　長峰真由美▽大洗町立夏海小教諭　大谷栄子▽城里町教委指導主事　高木輝夫▽茨城大教育学部付属中教諭　矢崎寛子、開田晃央▽ひたちなか市立佐野中教諭　伊師寿子